

第1回生駒市総合計画審議会（第三部会）会議録

開催日時 令和2年7月30日（木） 13：30～15：20

開催場所 生駒市役所 403・404会議室

出席者

（委員）高取部会長、浅間委員、藤尾委員、村上委員

（事務局）増田市長公室長、岡村企画政策課長、藤川企画政策課課長補佐、
片山企画政策課係員、竹田企画政策課係員

欠席者 なし

議事内容

(1)各小分野の検証

(2)その他

【事務局】（開会宣告、配布資料確認）

以下、発言要旨

【事務局】 全体会でも説明したとおり、今回、検証シートのフォーマットとともに、進行管理の方法を変更している。第5次総合計画では、すべての事業について実施したことを記載していたものの、目指すまちの実現に向けて効果のあった取組が不明という課題があった。第6次総合計画では、5年後のまちの実現に向けて効果のあった取組を3つまでピックアップして記載しており、進捗度評価も5年後のまち（細分野）ごとに実施している。それをふまえて議論いただきたい。

No. 111 健康づくり

【高取部会長】 各委員から事前に意見や質問を提出してもらっているが、その内容についてあらためてコメントをお願いしたい。

【藤尾委員】 高齢になると健康に気を付けるようになり、検診の受診率も年齢に比例している。セラビーいこまに座っている人を見ていると、ほとんどが高齢

者である。若い人は忙しくて検診を受けないことが何十年も前からの課題なので、実施するタイミング、実施場所、実施に係る費用面などで若い人が受診しやすい環境をつくってもらいたい。子どもの託児があれば、子連れでも行きやすい。ウォーキングは、健康づくり推進員連絡協議会、観光ボランティアガイドの会、行政の協働でコースを検証しながら企画した。ぜんざいを提供することで、参加者も集まる。しかし、実施しようと思って料理の準備も進めていたら台風など悪天候で中止のことが多々ある。場所の確保が大変なことも理解できるが、雨天時でも体育館で体操やゲームなど代替となることをした方がいいと思う。せっかく人が集まっているのにもったいない。

【高取部会長】 密にならない運動としてウォーキングはいいと思う。雨天時の対応についての意見は担当課には伝わっているのか。

【事務局】 伝えている。開催時期を見直すなどの対応が必要かもしれない。

【村上委員】 指標を見ていると受診率は上がってきているのでいいことだと思う。

【浅間委員】 検診の受診率には勤務先や指定医などで受診したケースも含んでいるのか。

【事務局】 国民健康保険の加入者を対象としており、指標はその中でも精密検査のみの受診率である。国民健康保険加入者のうち10～20パーセントの人ががん検診を受診しており、そのうち精密検査を受けているのが88.4パーセントということである。

【村上委員】 事前に質問した新型コロナウイルスの抗体検査については、色々な情報が飛び交っており、気になったため尋ねた。目に見えないものへの恐怖心がある。

【浅間委員】 この件については国の方針もあると思うが、市独自の取組として実施できうるのか。奈良県からの発信も少ないので気になっている。

【事務局】 県の方針に基づいた実施となる。抗体検査ではないがPCR検査の裾野を広げる検討を行っている状況である。

【藤尾委員】 感染症に関する対応が保健所のみになってしまっているのが気になる。保健所も職員数が減っている中ですべて対応している状況なので、市が中継ぎ役として対応してくれたら良いように思う。

【高取部会長】 冬場になってこの状況にインフルエンザの流行が加わればコロナウイルスかどうかとも分からなくなってパニックになることが予想される。うまく交通整理ができればいい。

【浅間委員】 「心の健康」分野の指標である自殺死亡率が上がっている。30代、50代の男性が多いと分析されているが、この層は事業の失敗等を起因とする自殺も想定され、ゲートキーパーでは解決できないのではないか。生駒市は中小企業が多いこともあり、経済的な支援等も必要に思う。社会福祉協議会が実施する給付・貸付への申請もかなり多いと聞いている。

【高取部会長】 計画策定時には想定していなかったことが起こっており、自殺者は確実に増える。子どもの鬱、働き盛り世代の失業などの実態もある非常事態なので何か手を打たなければならない。

【藤尾委員】 住民の感覚としては、生駒市で自殺死亡率が高いと思っていないと思う。プライバシーの問題で名前も出せない状況の中、なかなかみんなで助けづらい現状がある。

【浅間委員】 特に新興住宅地はサラリーマンも多く隣近所が見えない。住宅都市として高齢化が進んだとき、一つのネックになると思っている。

【藤尾委員】 SOSの手紙で子どもの相談に応じていることもあるが、本当に危険な状態にある子は手紙も書かないことも多い。ゲートキーパー研修は知識としての学びはあるが、住民としてどう動くかを考えた時にはもう一歩踏み出す必要がある。よその子を怒らない、助けられないような時代で、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて自殺とまではいかないが、心の健康が懸念される人が幅広い年代で増えるのではないかと懸念している。

【高取部会長】 原因は分析しているが具体的にどう対策をとるのか見えづらい。

【事務局】 自殺対策計画の中で取組は明確化しているので、どう具体化していくかを考えていくところである。

【高取部会長】 失業は金銭的な問題だけでなく、喪失感や将来への不安感などの話が出てくる。

【藤尾委員】 市としてどう支えていくか、対策課を一つつくって取り組むくらいでもいいような話である。

【浅間委員】 子育て世代のお母さんで悩んでいる人もいる。高齢化が進む現状の中で

も例えば夏祭りへの参加などをきっかけとして、地域の中で支えられるしくみがあれば良いと考えている。

No. 112 医療

【村上委員】 白庭病院から小児科がなくなったが、周りにはマンションが沢山あり、子どもたちを育てていくには必要だったと思う。市立病院にすべての診療科があり受け入れられる体制になっているのかどうか。

【高取部会長】 市立病院に医者が集まらない課題もある。

【事務局】 今は、昔の総合病院のようなものではなく、地域完結型の医療が基本になってきており、一次がかかりつけ医、二次が入院できる病院、より高度な医療を担う三次医療機関の3層構造で役割分担している。市立病院は二次医療を担っており、必要な診療科は総合病院が廃止されたことを契機に話し合っていて決めている。小児科の二次医療に関しては市立病院の医師が1名から2名体制に増えており、阪奈中央病院でも対応している。

【浅間委員】 鹿ノ台地区では一人暮らしの高齢者が250名くらい存在し、家族が関東など遠方にいる人も多い。学研奈良登美ヶ丘駅が最寄りなので、奈良市にかかりつけ医をもつ人も多い。しかし、高齢者を対象としたインフルエンザのワクチンを接種しようと思うと、健康課まで行く必要がある。高齢者はバスと電車の移動が大変で往復の交通費も掛かる。かかりつけ医や近所の公共施設で対応できるようにならないか要望しているが実現しない。南地区や真弓地区でも同じことが言えると思うので、高齢化の中で、生駒市の地形的な問題を考慮して市民の利便性を図ってほしい。新型コロナウイルスの影響で色々なことが変わっていく中で医療体制をどう構築していくかが重要である。場合によってはホテルを確保するなども必要になってくる。現在感染者はどこに入院しているのか。

【事務局】 県の指定病院に入院している。

【藤尾委員】 新しい取組であるケアリンピックは、若い人が現場を見たり事業者が一体となって交流できたり、展示や相談コーナーもあり、良い取組だった。住民レベルでシステムを見ることができたので、新型コロナウイルス感染症についても同じようにできればいいと思う。また、今回は専門学校のテ

スト期間と重なっていたが、そういった学生も参加できるような日程で開催できればいい。

No. 121 高齢者保健福祉・地域福祉

【浅間委員】 一人暮らしの高齢者で家族とうまくいっていない人も多い中、在宅医療を進めていくには限界があるように思う。人生100年時代となっている今、自助・互助・共助だけでは住民に負担が掛かる。プライバシーの問題があり民生委員では手を出せないことが多い。解決できるのは行政しかないので、もっと現場を見てもらいたい。

【藤尾委員】 地域のサロンでもボランティアの高齢化が進んでおり、参加者と運営している人の年齢が逆転している。世代交代が進んでおらず、参加はするが、運営側としてはしたくない、という人も多い。昔は自分がやりたいことは我慢してでも親の面倒をみていたが、今は、自分は忙しいので親の面倒をみてほしい、という割り切った人が存在する。それが普通で、見渡せば高齢者ばかりの時代なので、地域サロンも5年後には全滅してしまうのではないかと思っている。元気な人が主催者になってくれればいいと思う。

【事務局】 若い人も震災復興支援ボランティアなど目立つ活動には参加するが、地域の地味な取組には参加しない現状がある。もっと若い人が楽しみながら、気づいたら活動につながっていた、となるような仕掛けが必要だと感じている。

【藤尾委員】 すべて行政で対応できないのは分かっているのに、危機感を持っている。若い人に嫌われてでも自分たちの世代が伝えないといけないのかもしれない。

【事務局】 住民自治が弱っていくのにどう対応していくか、という話は第一部会でも議論にあがった。

【浅間委員】 高齢者が前に出すぎて後継者を育てられていない。市民自治協議会にどれだけの権限を渡すか、などの議論もある。

【藤尾委員】 翠光台など若い世代だけの地域もあり、そこでは祭りの時などでもうまくまとまっている。老人会などがあると昔のやり方を押し付けてしまいうまくいかないのかもしれない。

【浅間委員】 生駒市は住宅都市として若い人に入ってきてもらう必要があるので、子育てを重視したまちづくりをしていく必要がある。

【藤尾委員】 南地区2ヶ所で立ち上がった市民自治協議会には、PTAの場を活用して若い人も参加していると聞いているので、良かったと思う。ベッドタウンから脱却して新しいことをしたいという市の気持ちも理解できるが、周りを見渡せば高齢者ばかりである現実を目を向けてもらいたい。

【高取部会長】 若い世代が同世代でお祭りを実施するのはいいが、その延長線上に高齢者のお手伝いをするかということそうではない。逆にいうと、閉じたコミュニティとも言える。学生も東北の震災ボランティアには参加するが自分の住んでいる地域には興味がない。地元愛が必要である。

【浅間委員】 育友会活動も避ける傾向にあると聞く。学校での働き方改革が叫ばれるようになり、校長先生が教職員の方に気を遣っていると聞く。

【高取部会長】 介護予防・日常生活支援総合事業参加人数が目標値に達成していないことに対して、要支援者数が減少したからで、これを良いことだという趣旨の記載がある。指標として参加人数を増やす目標を立てていることと矛盾するのではないか。

N o . 1 3 1 障がい者保健福祉

【浅間委員】 家庭の中に障がいを持つ人がいることを家族は隠す傾向にある。家族がその気にならないとみんなで共有して守っていこう、という土壌にはならない。しかし、親が亡くなり障がい者が一人になり引きこもりとなる人も増えている。オープンにする方法を考えなければならない。

【藤尾委員】 親の立場になると、その気持ちも理解できる。支えるのは民生委員やボランティアであり、高齢化している。町単位の小さなエリアの中で真剣に何とかしようと行政が言わないと「何とかなる」になってしまう。30年前は60代を筆頭に、後ろには50代～30代までボランティアがいたが、今は、新しい活動者も70代である。ライフスタイルが変化している今、次の人材がいない。

【浅間委員】 民生委員もなり手がおらず、高齢になっても辞められない現状がある。

【村上委員】 そこまで取組が進んでいない中、新型コロナウイルス感染症が発生した

ため、担当課の自己評価B2は甘いのではないかと感じた。

№. 211 母子保健

【村上委員】 昔のように手助けやアドバイスがない中で子育てをしなければならない人を近所で助け合えるしくみができればいいと思う。

【藤尾委員】 ボランティアも、何か正式な肩書がつくと応募者が増える傾向にある。生駒市は保健師が子どものいる家庭を自転車で訪問するなどとても手厚い対応をしていると思う。

【事務局】 市民ニーズを形にして実施している。

【藤尾委員】 おやつづくりの活動をしているが、子どもと一緒に参加する母親とも世代間交流ができ、核家族化が進む中で一定の効果があると思っている。住民同士が関わり合いを持つ機会を行政がつくってほしい。

【浅間委員】 鹿ノ台のいきいきホールで、キッズ&シニアルームという子育てアドバイスをする取組をしている。小さな子ども連れの親は来るが、シニアの方はあまり来ない。

【高取部会長】 「育児」分野の取組に関する記述で、訪問事業の委託をやめて直営で実施する旨の記載があるが、直営でも問題ないのかどうか。人手が必要そうだが。

【事務局】 昔は1年で1,000人くらいの新生児がいたが、現在は800人程度となっている。2つの係で連携して実施しており、問題はない。

【事務局】 (庶務連絡、閉会宣告)

—— 了 ——